

研修報告書 No.20

所 属： 国立国際医療センター
研修先：大月病院

私は 2025 年 9 月 8 日から 10 月 3 日までの 4 週間、高知県幡多郡大月町にある大月町国民健康保険大月病院にて地域医療研修を行いました。普段、私は東京都の国立国際医療センターに勤務しており、三次救急対応を含む都市型医療の現場で研修を行っています。今回、県外からの立場で地域医療に触れることで、都市部とは異なる医療のあり方や、地域病院の果たす役割を多角的に学ぶ貴重な機会となりました。

大月町は人口約 4,500 人、高齢化率が約 50% を超える地域であり、住民の多くが高齢者です。大月病院は町内唯一の医療機関として、内科を中心に外科・整形外科・皮膚科・小児科領域まで幅広く対応しており、まさに地域の「総合診療」を担っていました。診療圏内には大規模な医療機関が存在せず、必要に応じて四万十市や宿毛市の基幹病院へ転院搬送を行う体制が整えられています。こうした限られた医療資源の中で、地域住民の健康を守る病院の存在意義を改めて実感しました。

研修では主に外来診療、入院患者管理、救急対応、そして施設・在宅への訪問診療に参加しました。外来では、高血圧、糖尿病、脂質異常症などの生活習慣病を中心に、慢性期疾患を複数併せ持つ患者さんが多く、医師が疾患のみならず生活背景、家族関係、就労状況などを踏まえて診療を行っている姿が印象的でした。医学的な正確さのみならず、患者さんの「生活に根ざした医療」を実践している点に、地域医療の本質を感じました。

救急対応では、日常診療の合間に搬送される救急患者に対して限られた人員で迅速に初期対応を行う現場を経験しました。都市部の病院であれば、救急科や各専門科に容易にコンサルトが可能ですが、大月病院では初療を担当する医師が主体的に判断を下し、必要に応じて高次医療機関への転院を決定します。救急車搬送に 40 分以上を要することも多く、現場での安定化処置と迅速な判断が極めて重要であることを学びました。こうした環境では、幅広い知識と判断力、そして冷静な初期対応能力が求められることを実感しました。

また、在宅および施設への訪問診療にも同行しました。病院に通うことが難しい高齢患者さんに対し、医師・看護師が定期的に診察を行い、体調変化に応じて治療方針を調整していました。病院・介護施設・地域住民が密接に連携し、患者さんが可能な限り住み慣れた環境で生活を続けられるよう支援している姿勢に感銘を受けました。都市部では在宅診療が分業的に行われることが多いですが、大月町では病院医師が直接関わることで地域に一体感が生まれている点が特徴的でした。

県外在住の医師として高知の地域医療を見たとき、地理的条件や人口構成の制約を補うために、医療従事者が多面的な役割を担っていることを強く感じました。医師のみならず、

看護師、薬剤師、リハビリスタッフ、地域包括支援センター職員が密に連携し、「限られた人員で最大の効果を発揮する」体制が築かれていました。医療の細分化が進む都市部に比べ、地域医療では人と人とのつながりを基盤とした包括的なアプローチが必要であることを痛感しました。

今回の研修を通じて、私は疾患を診るだけでなく「患者さんの生活全体を支える」という視点の重要性を学びました。都市部の高度急性期医療と異なり、地域では「完治よりも共生」「病を抱えながらの生活支援」という考え方方がより強く求められます。今後はこの経験を活かし、都市部で勤務する際にも、患者さんの社会的背景や生活環境を踏まえた全人的な診療を心がけたいと考えています。

最後に、このような貴重な学びの機会をくださった大月病院の先生方、病院スタッフの皆様、そして温かく迎えてくださった地域住民の方々に心より感謝申し上げます。